

# 四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書

2004年3月

四條畷市教育委員会

# 四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書

2004年3月

四條畷市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が平成15年度国宝重要文化財等保存整備費補助金事業の交付を受けて担当実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 正法寺跡は平成15年8月18日から8月20日まで、岡山南遺跡は平成15年9月26日から10月7日まで発掘調査を実施し、平成16年3月31日に整理作業を終了した。
3. 調査は、四條畷市教育委員会社会教育部生涯学習課主任野島 稔の指導の下、技術職員村上 始を担当者として実施した。
4. 発掘調査にあたっては、ウッディアイ株式会社 上田 良朋氏、奥村 又次氏の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 発掘調査の進行にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課・櫻井 敬夫氏から指導・助言を得た。記して感謝の意を表したい。
6. 調査補助については秋田 加奈子・糟谷 尚子が、出土遺物の整理・実測については村上 始・駒田 佳子・田伏 美智代が行なった。
7. 本書の執筆は、村上 始が行なった。
8. 発掘調査において出土した遺物および写真・実測図面等は、四條畷市教育委員会に保管している。

## 本 文 目 次

### 例　　言

第1章　遺跡の位置と歴史的環境 ..... 1

第2章　調査に至る経過 ..... 5

第3章　調査の成果 ..... 6

第4章　ま　と　め ..... 17

### 報告書抄録

付　章　清滝の古寺正法寺と氏寺の造営 四條畷市文化財シリーズ3

### 図　　版

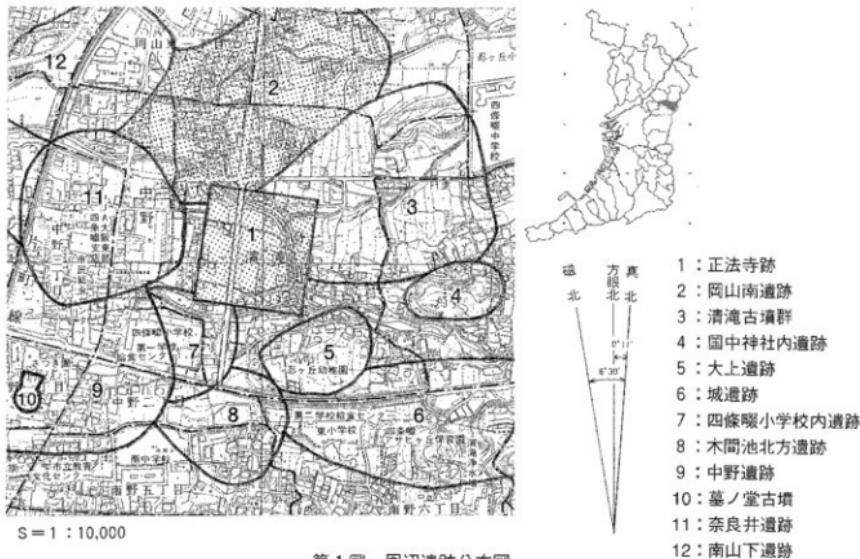
# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置する。正法寺跡は四條畷市清滝に所在し、飯盛山系の西側斜面から派生する清滝丘陵上にある。岡山南遺跡は四條畷市岡山・岡山東1丁目・清滝・中野に所在し、飯盛山系の西側斜面から派生する忍ヶ岡丘陵上にある。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸に広がる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地は、原始・古代における幾多の遺跡の存在が知られている。

## 旧石器時代

四條畷市周辺の旧石器時代の遺跡として、更良岡山遺跡の範疇である讚良川川床遺跡では、ハンドアックス・ナイフ形石器・細石器・削器・彫器などが出土している。また、四條畷市忍岡古墳付近・寝屋川市打上でナイフ形石器が採集されている。これらは枚方台地における旧石器研究上きわめて重要な位置をしめている。



第1図 周辺遺跡分布図

## 縄文時代

四條畷市田原遺跡や交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡で米粒文・山形文を施した縄文時代早期の押型文土器などが出土している。これらは近畿地方における最古の土器である。また、JR忍ヶ丘駅の南側にある南山下遺跡で長さ11cmの完全な有舌尖頭器が出土している。

縄文時代中期は、四條畷市南山下遺跡・砂遺跡、寝屋川市讚良川遺跡がある。讚良川では大量の船元式土器が出土した。

後期・晚期においては、四條畷市更良岡山遺跡で土偶・大型彫刻石棒・ヒスイ製石斧・土製勾玉などの祭祀具をはじめ、高壺形土器・深鉢・注口土器などの土器類と大量の石器類が出土した。他に四條畷小学校内遺跡や大上遺跡・清滝古墳群で土器類や石鍬が出土している。

## 弥生時代

四條畷市雁屋遺跡で弥生時代前期の大壺（高さ78cm）が出土している。この大壺は北九州の板付II式といわれているものである。その壺に伴い石包丁が2点出土した。そのうち1点は奈良県耳成山の流紋岩製である。この石包丁と大壺の出土は北河内で最初に稲作が開始されたことを示している。なお、この調査区の50m東側で縄文時代晚期の深鉢が出土している。その他、前期の遺跡は四條畷市田原遺跡・四條畷小学校内遺跡・ヒスイ製の獸形勾玉が出土した城遺跡、寝屋川市高宮八丁遺跡、大東市中垣内遺跡がある。

中期においては、畿内第III～V様式に属する雁屋遺跡がある。雁屋遺跡で多数の方形周溝墓が確認され、コウヤマキ・ヒノキ・カヤなどの木棺が出土した。なかでもコウヤマキ製のものは完全な姿で出土した。ヒノキの木棺から完全な人骨も出土した。方形周溝墓の溝から墓前祭祀に使われた朱塗りの壺や把手付き碗などが出土した。木製品では、双頭渦文が彫刻された蓋付き四脚容器などがある。材質はヤマグワで朱彩されていたが、現在は朱の痕跡を確認することはできない。その他、ノゲルミ製鳥形木製品は墓で使われた日本最初の出土例であった。また大阪府教育委員会の雁屋遺跡発掘調査でも集落跡から鳥形木製品が出土している。

石製品は大量に出土しているが、特筆すべきものは銅鐸の舌が2本出土していることである。その内の1本は徳島県吉野川産の塩基性凝灰岩製である。銅鐸については、「明治44年に砂岡山から入れ子になった銅鐸2口が出土した」と伝えられる砂山銅鐸があるが、関西大学の所蔵となっている。その他、分銅形土製品が2点出土している。

雁屋遺跡で後期のV様式に属する土器も多量に出土している。その中でも丹後・北陸地

方の様式をもつ把手付き鉢（住居跡）や脚付き鉢（円形周溝墓）、出雲の様式をもつ低脚壺（包含層）は日本海側との交流を示している。

雁屋遺跡は《中期において拠点的集落であり、後期になるとその位置をたもっていかなかった》と考えられていたが、大阪府内でもこのように活発な他地域と交流をした遺跡は見当らず、雁屋遺跡が衰退したとは全く考えられない。雁屋遺跡は中期から後期まで拠点的集落として存在した重要な遺跡である。しかし後期の土器については未整理のものが多く今後の研究の課題としたい。

## 古墳時代

古墳時代前期においては忍岡古墳がある。全長約90mの前方後円墳である。この古墳の豊穴式石室は保存され見学できる。この古墳築造に関わった集落は確認されていないが、今後の調査で発見できる可能性がある。

古墳時代中期になると四條畷市を中心にして馬の飼育が始まった。馬は朝鮮半島から運ばれ、渡来系の人々によって牧場が開かれた。

古墳時代の四條畷市は飯盛山系が南北に走り、山麓の西方2kmほどで河内湖となる。生駒山系から、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が河内湖に注ぎ、この川が自然の柵となり牧場に適した環境であった。

鎌田遺跡では楽器のスリザサラや祭具を載せる台が、奈良井遺跡では犠牲馬の首をはじめ、儀式で使われた人形・馬形の土製品やミニチュア土器が出土している。最近では大阪府教育委員会の調査による藤屋北遺跡で大量の製塙土器や木製の鎧が出土し、馬一頭を埋葬した土坑も発見され、注目されている。四條畷小学校内遺跡・奈良井遺跡・中野遺跡・木間池北方遺跡・城遺跡などで初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数多く出土し、渡来系の人々の存在を示している。

古墳については、墓ノ堂古墳をはじめ、馬飼いの人々が墓域とした清滝古墳群や大上古墳群など次々と築造された。大上古墳群からは横穴式石室が発見されたが、鎌倉時代に盗掘され遺物のほとんどは失われていたが、金銅装中空耳環が一点出土した。また、今年度城遺跡で全長約45mの前方後円墳を検出した。墳丘部は削平されていたが、葺き石や円筒埴輪列を確認した。主体部については明確な埋葬施設を確認することはできなかったが、墳丘の下面で約4×3mの隅丸方形の土坑を検出した。この土坑には、焼土や炭化物が堆積しており、土師器高壺が出土している。この遺構については、古墳築造時の祭祀に関するものではないかと考えている。

これらの古墳からは多くの埴輪が出土しているが形象埴輪は少なく、ほとんどが円筒埴

輪である。古墳から出土した形象埴輪としては忍ヶ丘駅前 2 号墳の琴を弾く人物埴輪が挙げられる。集落から出土した埴輪としては、忍ヶ丘駅前遺跡から人物埴輪・犬形埴輪・水鳥形埴輪、南山下遺跡から馬形埴輪、岡山南遺跡から家形埴輪が出土している。なお、この家形埴輪に伴って左足用の日本最古の木製下駄が出土している。

その他、大東市堂山古墳群、寝屋川市太秦古墳群・終末期の石宝殿古墳などがある。

## 奈良時代

古墳時代に飯盛山系山麓に築かれた古墳群が、奈良時代の正法寺建立の際に整地されたことにより破壊されており、ほとんどの主体部が削平されている。

正法寺周辺では近年奈良時代の遺跡が発見されている。木間池北方遺跡の河川から円面硯や土器と共に土馬が 7 体分出土し、今年度の国土交通省委託の発掘調査においても、河川から 4 体分以上の土馬が出土している。また南野遺跡では「大」の字を墨書きした土器が出土している。

城遺跡では通産省との合同地震調査が行なわれ、生駒断層の跡が発見された。この断層の研究の結果、断層の上の層から奈良時代の須恵器坏が出土し、地震は奈良時代以前に起こったと判断できた。その後、炭素年代法の分析から地震は縄文時代から弥生時代ごろであったことが判明した。近年、考古学者と地震学者が共同で研究する地震考古学が注目され、地震予知の研究がなされている。

## 平安時代

平安時代には井戸が多く発見されるようになるが、中野遺跡（平成 3 年度調査）では「應保二年 如月廿日」の墨書き曲物が出土し、岡山南遺跡では「高田宅」「福万宅」などの墨書き土器が井戸から出土している。上清澗遺跡では「塔の坊」の小字名が残る一番高い場所に方形基壇が確認され、その上に二間×二間の祠堂が建てられていた。この基壇の近くの斜面の溝から仏具などが発見された。木製聖観音立像 2 体・金箔製光背などの仏具、茶道具の茶釜・茶臼・貿易陶磁器、下駄、将棋の駒、瓦器碗・土師器皿・箸などの食器類が出土している。また、この溝で木簡も出土している。「壽永三年」の年号が書かれた題鑑軸や「はせのたね」と種の品種を書いた荷札が発見されている。

## 第2章 調査に至る経過

正法寺跡は過去数次にわたって発掘調査が行なわれ、白鳳時代素弁蓮華文軒丸瓦を創建瓦とし、東西に塔をもつ薬師寺式伽藍配置の寺院であったと推定されている。また白鳳時代から室町時代まで存在していたことが判明している。

平成5～7年の大阪府教育委員会による府道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う発掘調査で、基壇建物や掘立柱建物跡・土坑・井戸・溝などの遺構を検出している。また、平安時代中期の基壇の横から「正方寺」と墨書された土師器坏が出土している。

四條畷市教育委員会の発掘調査については、平成8年度に府道の東側の調査区で羽口が出土し、寺に所属する鋳・鍛造が行なわれたと考えられる。平成12年度の府道西側の調査区では、講堂跡に推定される場所で上記の基壇の続きを検出し、基壇建物の東西方向の規模が約26mまで確認できた。またその下層から掘立柱建物の柱列を確認し、その内2基の柱跡から素弁蓮華文軒丸瓦が4点出土したことから、正法寺創建時の掘立柱建物跡にあたると考えている。今回の調査地区は、平成15年7月31日付けでウッディアイ株式会社から四條畷市教育委員会に四條畷市大字清滝382-1・2の開発に伴って、文化財保護法第57条の2第1項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。この地区は推定伽藍配置で寺域の北東端の部分にあたるとともに、その北隣の小字名「双子塚」から出土したと伝えられる石棺が存在することや昭和53～54年度の調査で近隣から古墳を確認していることから、大阪府教育委員会文化財保護課と検討・協議を行なった結果、平成15年度の国庫補助事業として平成15年8月18日～20日まで発掘調査を行なうことになった。

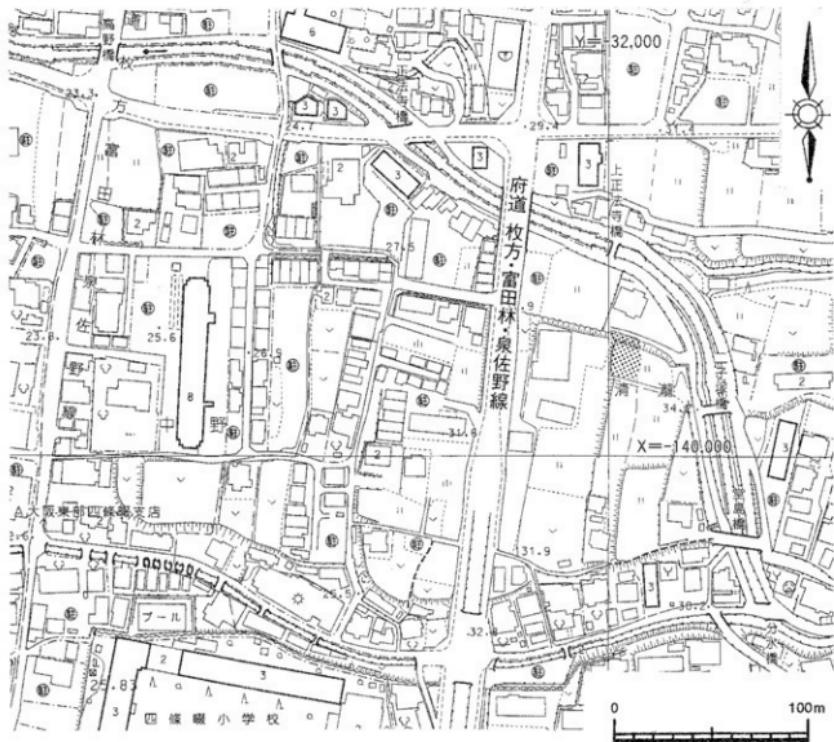
岡山南遺跡は、旧石器・縄文・古墳時代と平安時代～室町時代の集落跡として周知されている遺跡である。今回の調査地区的西側では、昭和61年度の調査において古墳時代中期の掘立柱建物跡、平安時代の掘立柱建物跡・溝・方形板枠井戸、鎌倉時代から室町時代の溝・土壙・掘立柱建物跡・溝などを確認している。特に平安時代の方形板枠井戸からは多くの土器類と共に「高田宅」「福万宅」と墨書された黒色土器A類の碗が出土している。

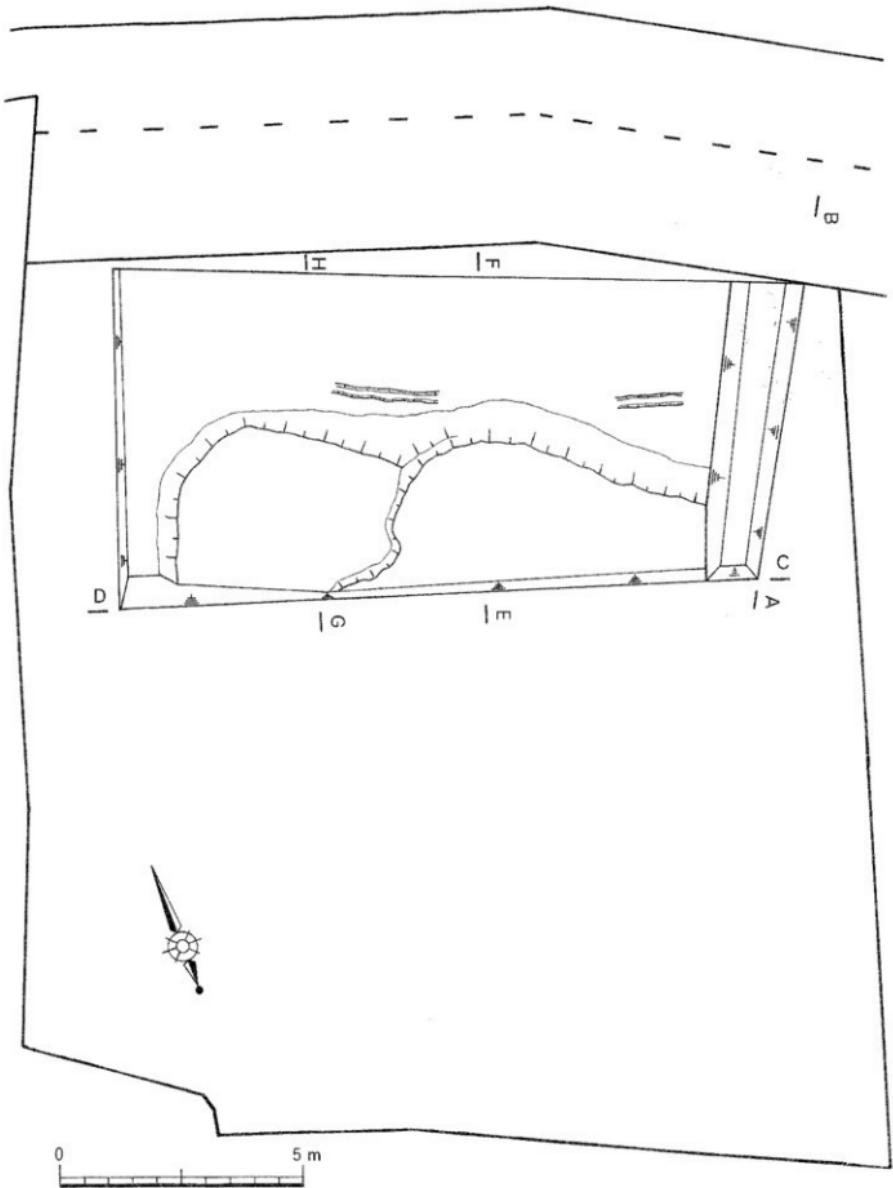
今回の調査地区は、平成15年9月4日付けで奥村 又次氏から四條畷市教育委員会に四條畷市大字岡山95-1の開発に伴って、文化財保護法第57条の2第1項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。開発内容の検討・協議を行なった結果、平成15年度の国庫補助事業として、平成15年9月26日～10月7日まで発掘調査を行なうことになった。

### 第3章 調査の成果

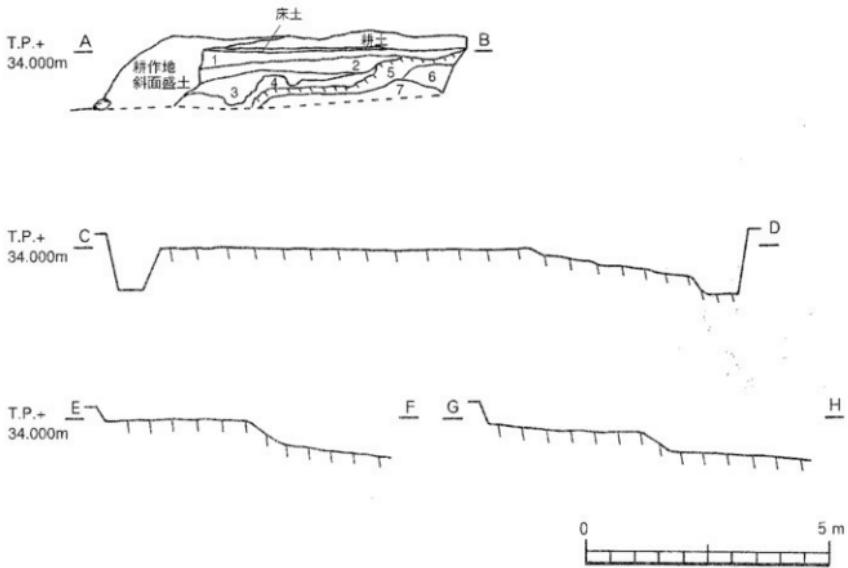
#### 正法寺跡（第2図）

今回の調査地区は推定伽藍配置で寺域の北東端の部分にあたるとともに、その北隣は小字名「双子塚」で、過去にその地から出土したと伝えられる石棺の蓋が、南東側に所在する国中神社に、石棺の身が中野の正法寺に現存している。また昭和53～54年度の一級河川清瀧川分水路改修工事に先立つ調査で古墳を確認している。以上の状況から宅地造成に伴い切土を行なう箇所については遺跡を破壊するため、発掘調査を実施することとなった。調査面積は117m<sup>2</sup>で、調査前の現状は1枚の耕作地であった。





第3図 遺構平面図



第4図 東壁断面図・エレベーション図

#### 東壁断面図土層説明

1. 灰色砂質土 (5Y 6/1)
2. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)
3. 黄灰色砂質土 (2.5Y 6/1)
4. 灰色砂質土 (N 5/)
5. 黑褐色砂質土 (2.5Y 3/2) に 6 層のブロック一部混入
6. 灰白色シルト (7.5Y 7/1)
7. 灰黄色粗砂 (2.5Y 7/2)

#### (1) 基本層序 (第4図)

第I層 耕土 厚さは、約30cmである。現代の耕土。

第II層 床土 厚さは、約10cmである。現代の床土。

第III層 灰黄色系の砂質土 厚さは、約70~120cmである。瓦・土師器・須恵器などを包含している。

第IV層 黑褐色砂質土 遺構面である。

第V層 灰白色シルト

第VI層 灰黄色粗砂

## (2) 遺構・遺物（第3～6図・図版1・4）

耕土・床土の下層で灰色砂質土層（第1層）を検出した。周辺の調査状況から判断するとこの堆積土は中世の遺物包含層と考えられたが、今回の調査地区では明確な遺物が出土しなかった。

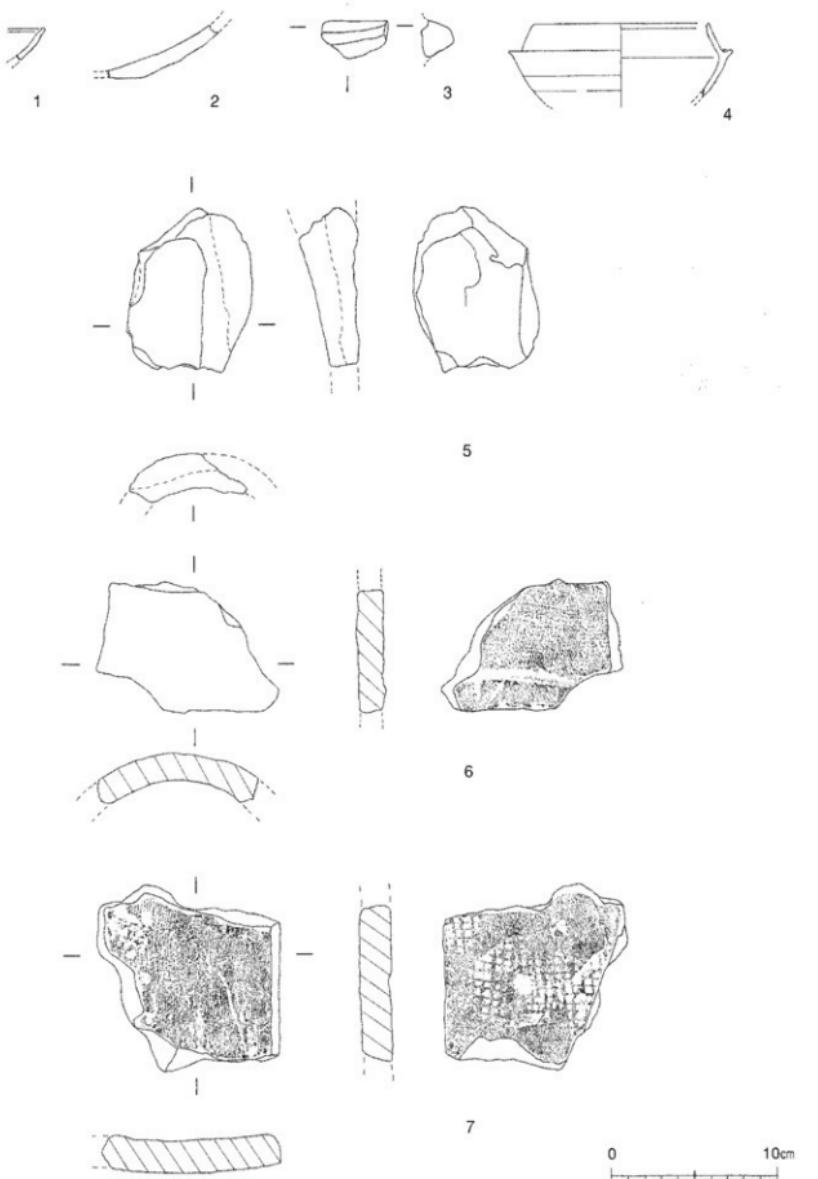
この約10～20cmの堆積土を掘り下げたところ、南側で黒褐色土の遺構面と思われる面を確認した。確認面の高さは、T.P.+34.000mである。

そこでその状況を確認するために東側に南北方向のサブレンチを設定し、掘削したところ、この面は北へ向かって段を形成しながら約1m程低くなっていること、およびこの土層の下層は軟弱なシルトおよび粗砂であること、またこれらの土層がブロック状に混入していることが判明した。このことからこの面の土層は自然堆積層ではなく、下層の軟弱な層を補強するために搬入したものではないかと考えられた。そこで落ち込み全体のラインを確認したのち層序ごとに掘り下げることとした。第2層から第4層の堆積土からは、瓦・土師器・須恵器などが出土したが、過去の正法寺跡の発掘調査と比べるとその出土量は極端に少なかった。

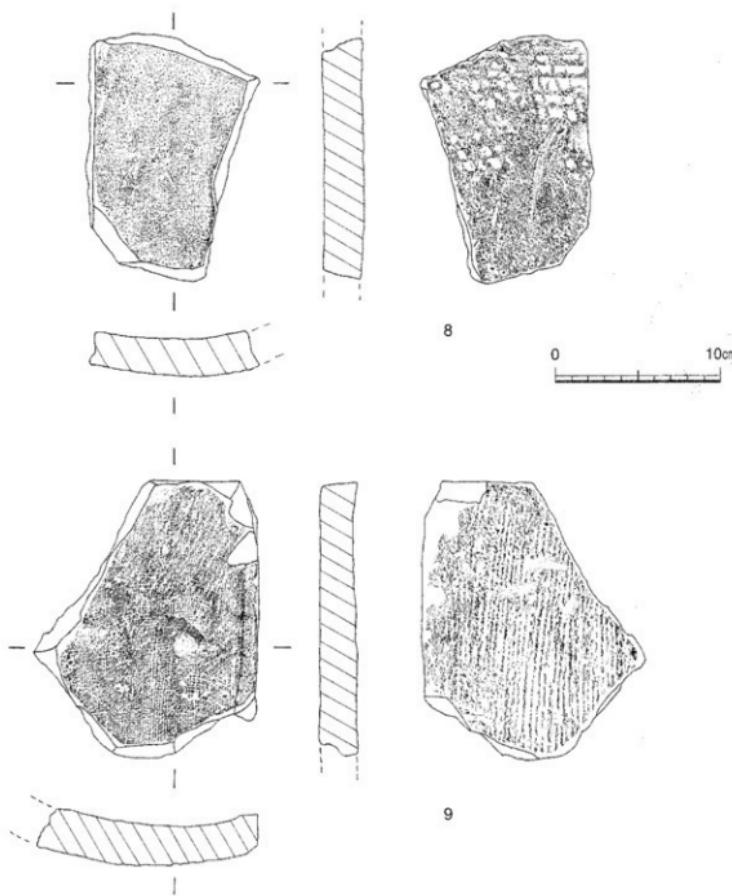
この状況は平成9年度に西側隣接地で発掘調査を実施した際の状況に類似しており、その際は伽藍の中心から外れた場所にあたるため遺構や遺物の密度が低いものと考えた。今回の調査地区についても、第3図からもわかるように遺構の密度は非常に低く、鋤溝状のものを1本検出ただけであった。

今回調査を実施するにあたっては、正法寺の寺域内であると同時に、国中神社に現存する石棺の蓋と中野の正法寺に現存する石棺の身が出土したと伝えられる小字名「双子塚」の南側隣接地であることから、古墳の存在も視野にいれてのものであった。このことから、前述した南から北へ向かって段を形成しながら低くなっていく人為的な堆積土が、古墳の墳丘の一部の残存部分ではないかとも考えたが、調査範囲が狭いことや後世に削平を受けている箇所があることなどから、現段階ではそのように結論付けることは危険であると考える。ただし、古墳時代の遺物や埴輪の破片なども出土していることから、これらの可能性を否定することは避けたい。

今回出土した遺物は、コンテナの数にして1箱分であった。そのほとんどは瓦の小片で、軒丸瓦の丸瓦部（第5図・図版4-5）・丸瓦（第5図・図版4-6）以外は、ほとんどが平瓦であった。



第5図 出土遺物



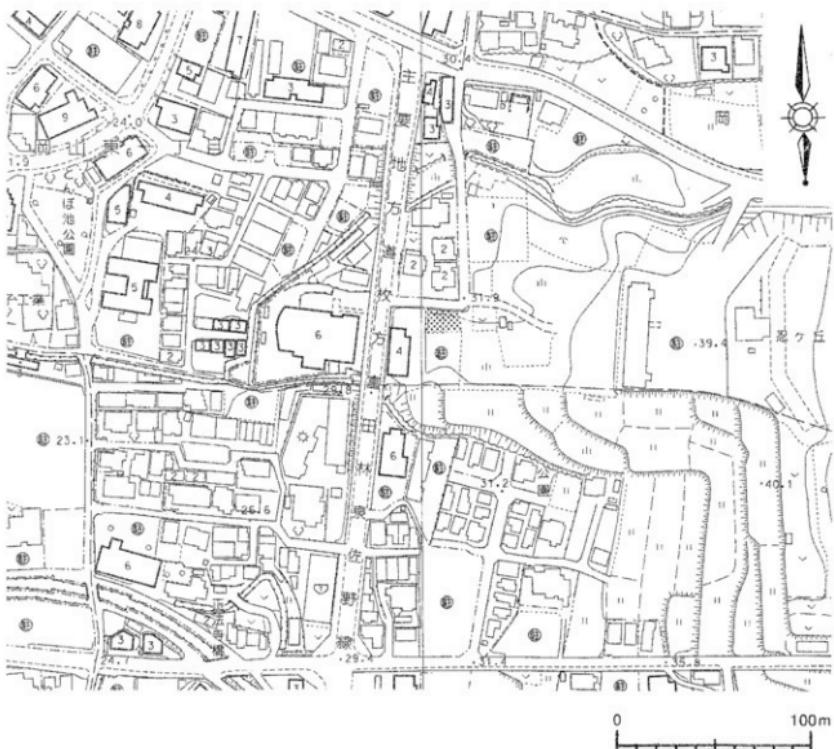
第6図 出土遺物

平瓦の叩きの痕跡については、過去の出土例と同じく、正格子（第5図・図版4-7）・斜格子（第6図・図版4-8）・縄目（第6図・図版4-9）のものがみられた。その他の遺物としては、瓦器碗（第5図・図版4-1）・須恵質練り鉢（第5図・図版4-2）・埴輪（第5図・図版4-3）・須恵器坏身（第5図・図版4-4）などが瓦類と同じく第4層から出土している。

### 岡山南遺跡（第7図）

今回の調査地区は、昭和61年度の調査において古墳時代中期の掘立柱建物跡、平安時代の掘立柱建物跡・溝・方形板枠井戸、鎌倉時代から室町時代の溝・土壙・掘立柱建物跡・溝などを確認し、平安時代の方形板枠井戸からは多くの土器類と併に「高田宅」「福万宅」と墨書きされた黒色土器A類の碗が出土した調査地区の府道を挟んで東側に位置する。また、その隣接地においても過去の調査で遺構を確認している。

以上の状況から駐車場造成に伴い切土を行なう箇所について、国庫補助事業として東西方向にトレーナーを設定して遺跡の範囲を確認し、遺構の拡がり方にあわせて原因者の負担でトレーナーを拡大する方法で調査を行なった。調査面積は、国庫補助事業分40m<sup>2</sup>・原因者負担分356m<sup>2</sup>であった。調査前の現状は、東西に棚田状になる2枚の耕作地であった。



第7図 位 置 図

### (1) 基本層序 (第8図)

- 第I層 耕土 厚さは、約20cmである。現代の耕土。
- 第II層 盛土 厚さは、約40cmである。現代の盛土。東側の耕作地のみで確認。
- 第III層 灰黄色系の砂質土 厚さは、約10~90cmである。中世の遺物包含層。
- 第IV層 黄橙色粘質土 遺構面であり、地山面である。

### 南壁断面図土層説明

- |                          |                        |
|--------------------------|------------------------|
| 1. 褐灰色砂質土 (10YR 4/1)     | 2. にぶい黄色砂質土 (2.5Y 6/2) |
| 3. にぶい黄橙色砂質土 (10YR 7/4)  | 4. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)   |
| 5. 黄灰色砂質土 (2.5Y 6/1)     | 6. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 4/2)  |
| 7. 暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y 3/3) |                        |

### (2) 遺構・遺物 (第8~10図・図版2~3)

東側の上段では、耕土・盛土の下層で褐灰色砂質土層（第1層）を検出した。この土層の堆積は薄く約10cm程度であった。この堆積土を掘り下げたところで遺構面を検出した。西側の下段では、耕土の下層で暗灰黄色砂質土（第6層）と暗オリーブ褐色砂質土（第7層）の遺物包含層を検出し、それらを約20~50cm掘り下げたところで遺構面を検出した。遺構面の高さは、東側の上段でT.P.+34.300m付近、西側の下段でT.P.+33.400m付近である。

今回検出した遺構は、Pit56基・土坑11基・溝10本であり、そのほとんどは東側の上段から西側の下段へ移る斜面と西側の下段に集中していた。その中でも斜面で検出した土坑6は一辺が約2mの隅丸方形で深さは約40cm、土坑7は2×2.5mの楕円形で深さは約40cmで、それぞれ土器がまとめて出土している。また土坑5については、約3.5m×約1.8mの楕円形の掘り込みの中心部に直径約1.2mの円形で深さ約1mの掘り込みがあり、湧き水もみられることから、井戸の可能性が考えられる。下段で検出した土坑1は、一辺約2.7mの方形で深さは約25cmであった。

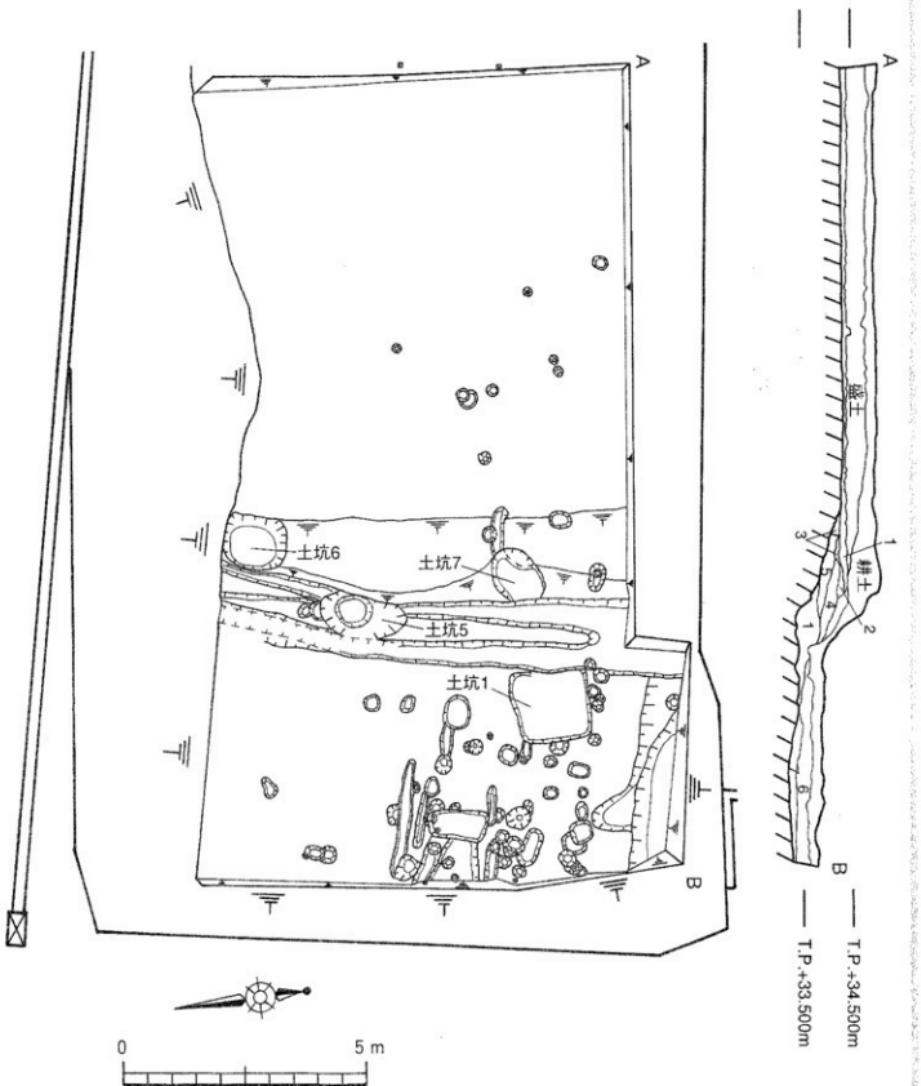
今回出土した遺物は、コンテナの数にして3箱分であった。そのほとんどは小片で、図示できたものは以下のものである。

#### 土坑1出土

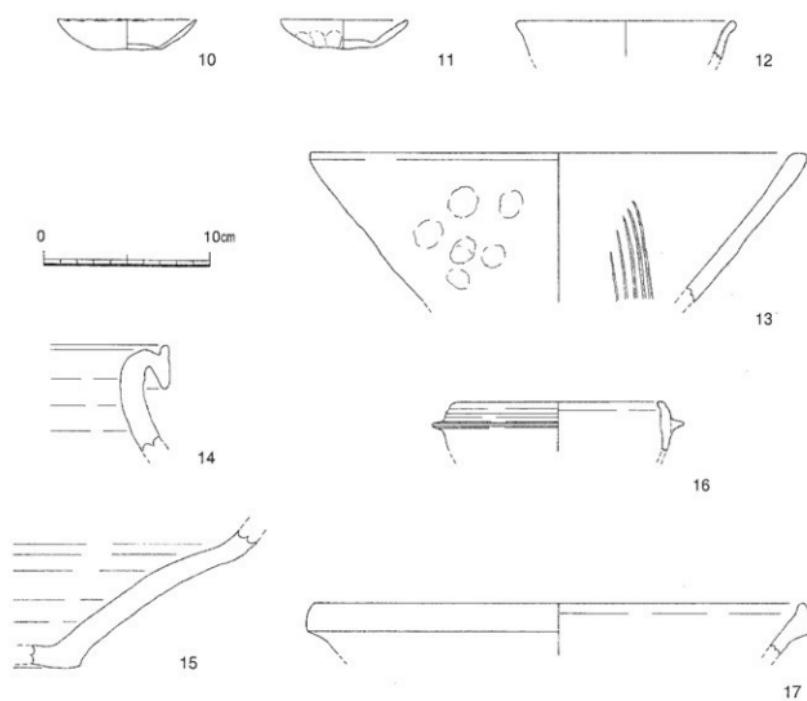
土師器皿（第9図・図版5-10・11）、青磁碗（第9図・図版5-12）、瓦質摺り鉢（第9図・図版5-13）

#### 土坑5出土

信楽焼大甕（第9図・図版5-14・15）、小型瓦質羽釜（第9図・図版5-16）、東播磨系須恵器練り鉢（第9図・図版5-17）



第8図 遺構平面図・南壁断面図



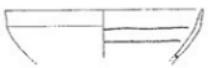
第9図 出土遺物

### 土坑6出土

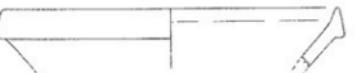
青磁碗（第10図・図版5-24）、土釜（第10図・図版5-25）

### 土坑7出土

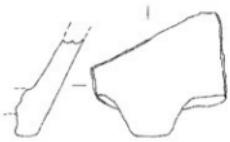
瓦器碗（第10図・図版5-18）、瓦質鉢（第10図・図版5-19）、東播磨系須恵器練り  
鉢（第10図・図版5-20・21）、瓦質足釜（第10図・図版5-22・23）



18



20

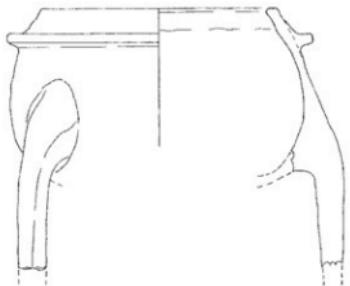


I

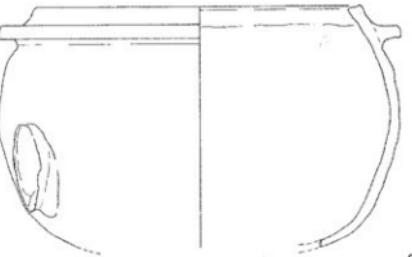
19



21



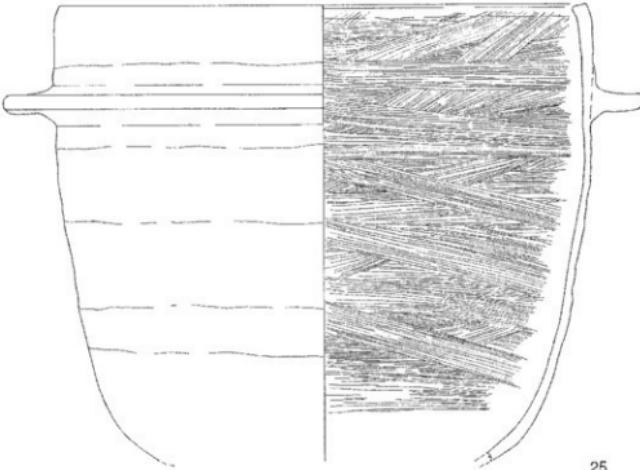
22



23



24



25

第10図 出土遺物

## 第4章 まとめ

### 正法寺跡

今回の調査地区は推定伽藍配置で寺域の北東端の部分にあたるとともに、その北側隣接地は小字名「双子塚」で、過去にその地から出土したと伝えられる石棺の蓋が、南東側に所在する国中神社に、石棺の身が中野の正法寺に現存している。また昭和53~54年度の一級河川清流川分水路改修工事に先立つ調査で古墳を確認しており、正法寺は古墳群を削平して建立されたことが判明している。そのような状況のもと今回の発掘調査では、正法寺の寺域の北東端もしくは寺の関連施設やそれより以前の古墳が確認できるのではないかという考えをもって発掘調査を行なった。しかし前述したとおり、寺に関するものとしては、伽藍の中心から外れた場所にあたるためか遺構や遺物の密度は非常に低く、鍬溝状のものを1本検出しただけであった。また、その人為的な堆積土から古墳の墳丘の残存部分ではないかと考えた地形に関しても、調査範囲が狭いことや後世に削平を受けている箇所があることなどから、現段階では古墳であると結論付けることは危険であると考える。ただし、古墳時代の遺物や埴輪の破片なども出土していることから、さらに南側の地域を発掘調査する機会を得たときの課題としたい。

### 岡山南遺跡

今回の調査地区では、付近における昭和61年度の調査において確認されている古墳時代や平安時代の遺構は確認できなかった。しかし、今回検出した多くの遺構のうち土坑6と土坑7については、数個の自然石が遺構内に崩れ落ちた状態で検出し、完形に近い羽釜などの遺物がまとまって出土している点から、中世墓の可能性も考えられる。ただし、そのほとんどは現在の耕作地を造成する際（時期は不明）に削平を受けているため、詳細は不明である。また井戸と思われる遺構も検出できたことから、JR忍ヶ丘駅周辺から東へ拡がっていた中世の集落が、さらにこの地域まで拡がっていることが確認できた。

# 報告書抄録

フリガナ	シジョウナワテシナイセキハックツチョウサガイヨウホウコクショ
書名	四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書
シリーズ名	国庫補助金事業
著者名	村上 始
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL 072-877-2121
発行年月日	2004年(平成16年)3月31日

所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
ショウホウシアト 正法寺跡	四條畷市清滝	272299	34° 44' 16" 135° 38' 58"	平成15年8月18日 ~8月20日	117m <sup>2</sup>	宅地造成
オカヤマミナミイセキ 岡山南遺跡	四條畷市岡山		34° 44' 25" 135° 41' 30"	平成15年9月26日 ~10月7日	396m <sup>2</sup>	駐車場造成

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正法寺跡	寺院跡	中世	溝	瓦	
岡山南遺跡	集落跡	中世	土坑・井戸	瓦質土器・青磁 土師器・須恵器 陶器・瓦器	

# 清滝の古寺正法寺と氏寺の造営

- 目 次 -

1. 清滝の古寺を訪ねて
2. 小野山正法寺と行基49院
3. 清滝寺と役行者
4. 清滝正法寺の創建
5. 伽藍の造営と正法寺
6. 清滝の正法寺の終末

1975年12月

四條畷市教育委員会

## はじめに

終戦後まもない頃、私はかつて畠山の美術の先生であり、当地方の考古学の先駆者であった片山長三先生のお宅へまいり色々とご指導を受けていました。その部屋の襖には、昔の四條畠の復元図が先生の手によって描かれていました。飯盛山を中心に北に清滝の山々、手前には深野池の葦と漁舟を配し、水鳥の飛んでいる風景で中野雁屋などの村々と共に左部分には三重の塔、金堂などの伽藍を配した清滝の正法寺の姿が美しく描かれていました。先生のお話と共にこの襖絵の印象は今も私の脳裏に深く残っています。私と正法寺の出会いはこの時からはじまったのです。

この正法寺に関しては、故平尾兵吾先生をはじめ、藤沢一夫・江谷寛岡先生の研究が残されています。また昭和44年冬におこなわれた府教委の発掘調査は正法寺の考古学資料を多く提供される結果となり、創建以来の盛衰の様子をある程度あきらかにされました。これらをふまえ今回改めて日本考古学協会員の瀬川芳則先生にお願いし、正法寺の論文をいただきこれを文化財シリーズ第三集としてみなさんのお手元にお届けすることにいたしました。

市民憲章に“豊かな伝統と歴史をまもり新しい文化をそだてます”的なことばがありますが、郷土四條畠の大切な遺跡をまず知っていただき、それがより深い文化財に対する認識と愛護につながりますれば幸甚です。執筆の瀬川先生に謝意を表してはじめのことばをいたします。

昭和50年12月

四條畠市教育委員会

教育長 櫻井 敬夫

その昔、清滝川の右岸にそって、山越えの古道清滝街道が、さかんに利用された。今は左岸の国道163号線が、大和への交通の幹線道路である。

江戸時代には、この清流にたくさんの水車場が並び、大阪の道修町（ドショウマチ）へ収めるための薬種をひく作業をした。昭和28年の洪水で、水車場も消えたままになってしまったが、ついこのあいだまで、コットン・コットンと回り続ける水車の姿が見られたわけである。

そして、この川沿いに古代寺院正法寺の優美な、またある時には雄大な伽藍が建ち並んでいた。

### 1. 清滝の古寺を訪ねて

四條畠市清滝字正法寺の地名どうり、清滝に正法寺と呼ばれる寺院があった。

そこは生駒山地から派生する小さな丘陵の上で、海拔約30メートル。それほど高い地形とはいえないが、寺院付近に立つと、遠く六甲山地までも眺望がひらける見晴らしのよい地形であることがよくわかる。

思えば、このあたりの水田からは、よく古瓦が拾われていた。布目（ヌノメ）のついた平瓦などなら、ちょっと注意していると足もとにころがっていたものである。

したがって、古瓦マニアもたびたび出没したらしい。地元の古文化研究保存会の有志たちが、この寺の瓦資料のほとんどは、熱心なというか偏執的というか、とにかく彼等マニアによって持ち去られたとこぼしていた。

宇正法寺にのこる「堂の前」・「堂の庭」の地名も、それがどの時代にかかるものであるのかは不明であっても、やはり重要な正法寺の伝承となっている。

ところで、現在の正法寺は中野にあって、浄土宗の寺院であるが、元和8（西暦1622）年に僧円明が清滌の地から移し、それから40年ほどの間に、僧堅恵が真言宗から浄土宗に改めた（転宗）ものである。したがって、現在の正法寺に伝わる記録は、正法寺の長い歴史を考えてゆくうえでおおいに参考にしなければならない。また、昭和44年度と昭和50年度には、待望の発掘調査が実施せられ、当寺の規模やその伽藍についての考証が一歩前進したのであった。

清滌で小倉昇三氏宅を訪ね、夫人から見事な蓮華文（レンゲモン）の軒丸瓦を前にしながら、寝屋川高等女学校長として、また考古学者として高名であった故平尾兵吾先生と正法寺との出会いの模様などの話をうかがっていると、この古い寺に対する土地の人々の想いが、痛いほどに感じられた。

以下に、この寺に関して、思いつくままに、紹介と雑感・雑考をめぐらせてみたい。

## 2. 小野山正法寺と行基49院

中野の正法寺に伝わる記録（正法寺縁起）等によると、正法寺は、天平11（西暦741）年に有名な行基（ギョウキ）の開基した聖武天皇の勅願寺で、行基49院のひとつであった。また七堂伽藍のそなわる大寺で、小野山正法寺と号したという。

行基といえば、「近頃、小僧行基とその弟子がちまたにあふれ、みだりに幸・不幸を説き、同志を集めても指やヒジを切ったり焼いたりして苦行といい、戸別訪問しては食餌以外の寄付を要求し、悟りを開いたなどと詐称して百姓を妖惑」すると、特に名指しで違法行為を指摘された時期（養老元年、西暦717年 続日本紀）もあったが、長屋王事件（西暦729）のあと藤原氏から光明子が、皇族以外の女性としてははじめて皇后になると、行基らの民衆救済的な布教活動に対する政府の見解が急速に変る。

そして、小僧と呼ばれ、危険な活動家と見なされていた行基は、行基法師と呼ばれるようになり、ついには僧正以下のすべての僧官の上にたつ大僧正の地位を得るにいたる。

時あたかも政局は混迷し、聖武天皇は精神的にも疲れきっていたのであろうか、山背国相楽郡の恭仁（クニ）宮、近江国甲賀郡の紫香楽（シガラキ）宮、そして行基を大僧正に任命する前年の天平16（西暦744）年には難波宮へと、数年の間に転々と遷都をくり返しているのである。

政権の担当者は、橘諸兄（タチバナノモロエ）で、政策ブレーンの中心をなしていた者に僧玄昉（ゲンボウ）がいる。そして、国ごとに僧寺（国分寺）と尼寺（国分尼寺）を建てよだの、東大寺（総国分寺）を建立するのだなどの詔（ミコトノリ）が、相ついでだされるのであった。

いかにきらびやかな天平寺院が諸国にその甍（イラカ）を輝かせ、また東大寺の大仏の巨躯が完成したにしても、庶民にとっては、まさに無策で無責任な政権であったことであろう。

遷都と造寺のさわぎのため、「用度の費すところ、あげて計（カゾ）う」（続日本紀）ことでもできないほどで、そのために「いまや天下は憂（ウレ）え苦しみ、居宅すら定まらない」（続日本紀）ありさまである。

そしてこの遷都さわぎの終止符は、平城京の薬師寺に集められた大安寺・元興寺・興福寺などの僧たちの意見によってうたれ、天平17年、再び平城京へ天皇たちが帰ってきた。

このような時代の様子を考えていくと、その中で行基の果たしたであろう役割を、ついには権力の中にくみこまれていった彼と、そして反権力的な行動によって、畿内の民衆に大きな影響力をもっていた彼を、大僧正などという破格の待遇で迎え入れざるをえなかつた政府を考えあわせるならば、清滝街道ぞいの古寺が、何らかの形で、行基とのかかわりをもつことは、じゅうぶんに考えうることであろう。

ただし、正法寺が行基49院のひとつであるという寺伝については、この寺が行基の開基だとしているのと同類の、きわめて信ずるにたりないものである。

行基は、30才代の後半から、天平21年に80才で死亡するまでの間に、49の寺院を造っている（続日本紀）。彼の一生は、実に多彩多忙をきわめていたようである。行基菩薩のことばがあるとうり、行基に対する信仰が、49院の分布する京畿内に盛んであったと思われる。

ところで、河内には行基建立の寺院、すなわち49院に含まれるもののが6寺院あるが、それらは、河内郡・交野郡・丹比郡（たじひぐん）・茨田郡に属しており、清滝の属する讚良郡の名はでてこない。交野郡・茨田郡で行基年譜に述べられている寺院は、次の三ヶ所である。

交野郡一条の久修圓院 神亀2年

茨田郡伊香の教方院 天平5年

茨田郡伊香の薦田尼院 天平5年

しかし、今日多数の古寺が、行基を開基とする伝承をもっており、そこに行基菩薩崇拜のなみなみならぬものであったことがうかがい知られるのである。

以上は、行基云々について述べたので、次に小野山正法寺の山号について少しだけ参考意見を述べておこう。

日本書紀の欽明天皇23年秋七月の条に、河内國の更荒（サララ）郡の鷦鷯野邑（ウノノサト）の記事がある。そういうえば、持統天皇の幼名も鷦鷯讚良（ウノノサララ）の皇女であった。

おそらくは、オノもウノも同じア行の音であり、ウ野の里に山号のオ野も端を発しているものであろう。

そして、当地がウ野といわれたのは、河内平野が低湿な湖状をなしていたと思われる当時、水鳥が多く棲息していた付近の景観によるものであろうか。

なお、さきに引用した日本書紀の記事では、新羅よりの使者が帰国せずに住み着き、その子孫が今は河内の國の更荒郡ウノノサトの新羅の人ということになっている。

また、新撰姓氏録の未定雜姓の項に宇努連（ウノノムラジ）の名があり、河内國に住み新羅の皇子であった金庭興の後裔（コウエイ）と記されている。

したがって、新羅系の渡来者たちによって、当地にいち早く古代寺院の建立がなされたものであったかも知れないのである。そしてこのウ野の地にちなみ、宇努連の氏姓をもつにいたったとも考えられよう。

このほか、当地方に關係を深くしたと思われる渡来系の氏族には、百濟系と伝える宇努造や、甲可（鹿深）氏があるが、註釈欄に別記したので、参考としていただきたい。

### 3. 清滝寺と役行者（エンノギヨウジャ）

長尾の正俊寺は、領主久貝因幡守正俊の名を寺につけたことからもわかるように久貝家の菩提

寺として建立された禪宗寺院である。

正俊の子正世が、亡父と一族のために、讃良山清滻寺中野坊（正世公墓碑の銘文）もしくは、讃良山中坊清滻寺（正俊寺縁起）を慶安2（西暦1649）年長尾に移して建てたものである。

清滻寺中野坊と中坊清滻寺とでは、微妙なくいちがいを感じはするが、平安時代に、東高野街道と清滻街道とにそむ地の利を得て、おおいに発展をした真言寺院小野山正法寺が、付近の山麓にいくつかの坊をもつにいたったことも考えられるであろう。

いずれにせよ、現在正俊寺には、本尊として黒仏（クロボトケ）で知られる観迦如来座像一体と、府指定文化財となっている立派な十三重の石塔があり、いずれも清滻寺から運びこんできたものである。

正法寺の全体をさしているのか、あるいはその一坊をいうものであるのかは別にして、清滻寺の寺号とともに、正俊寺の資料（縁起及び、墓碑銘）は、清滻寺の開基を修驗道の師祖といわれる役小角（エンノオズヌ）すなわち役行者にあてている。

これこそどこへ行っても言い伝える役行者開基の伝承である。役小角についての細事は不明な点が多いが、7世紀から8世紀にかけて、大和の葛城山中で修業をつんだ呪術者として知られている。

真言宗・天台宗が共に密教を伝える過程で、呪術的・山岳信仰的な要素を深め、山岳にあって苦行をつみ、そこから呪驗力をつけようとする験者（ケンザ）が現われると、各地にその靈山が生まれ、彼等はいずれも役行者を大先達として崇拜するようになる。

中世末になると、金峯山・大峯山・熊野山は靈山中の靈山として、そこで登拝修行をめざす行為が民間にまでも流行した。特に熊野山については、アリの熊野詣のことはどうり盛況をきわめたのである。

清滻といい清滻川といい、また山岳を背後にする真言寺院正法寺といい、役小角との結びつけにふさわしい条件はそろっている。したがって、この種の民間信仰に当寺が背に向けることは、到底考えられないことであろう。

中野の正法寺の記録にある行基開基にせよ、この役小角開基にせよ、いずれも古い法燈を誇る当寺の縁起を、それぞれの時代の宗教界の動静すなわち信仰需要を、敏感にとらえた知恵者の策したところであろう。そして、時代の流れを適確にとらえることができはじめて、本来は伝統的に保守性をもつ古い寺院が、廃絶してしまうことなく、長期間の維持を可能にするのである。

#### 4. 清滻正法寺の創建の時期

すでに述べてきたことからもわかるように、この寺の創建の時期を、行基や役行者に結びつけて論することはできない。同様に、女帝持統の幼名であるところの、ウノの讃良に関連を求めて当寺の創始を求めるのも、さしたる根柢があるようには思えない。

すなわち、清滻字正法寺で発見している古瓦のうちで、最も古式の形式をもつものは、行基・役小角・ウノの讃良皇女らの活動期よりも、古瓦の形式からいうと、一時期さらにさかのほる古式の蓮華文をあらわす軒丸瓦で、小倉昇三氏所蔵のものがその典型である。

古瓦研究者が、八葉素弁蓮華文（はちようそべんれんげもん）とよぶであろうこの種の軒丸瓦は、通常百済系といわれるもので、類品を百済の故地扶余とその付近に見ることができるものである。

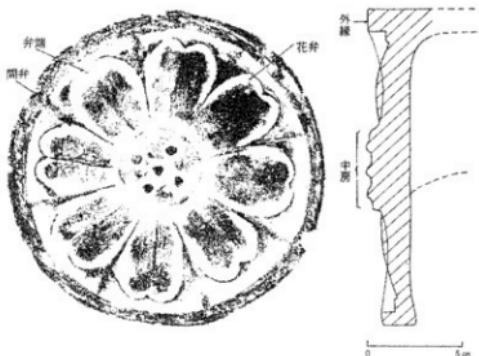
過日、この瓦について幾人かの研究家の見解を聞く機会を得たが、多くの人が飛鳥時代の末頃といっていた。

飛鳥時代と次の白鳳時代を、どのあたりで区分するのかは、容易にはいいがたいのであるが、大化の改新（西暦645年）を目処にしていることが多い。

宇正法寺では、八葉素弁のこの種の軒丸瓦は、最近の大坂府・四條畷市の調査の際にもいくつか出土して、もはやこの瓦の時期に、当寺創建のおこなわれたことが動かしがたい事実と見なされるにいたっている。

ただし、この瓦をもって、古式の蓮華文であり、また何の飾りもない外縁（周縁）の幅の薄いことなどのみによって、飛鳥時代にあてることには問題があるようである。

すなわち、藤沢一夫氏が指摘（河内清滝寺法名正法寺考）しておられるように、「花弁は弁端切込形式に属し、間弁の頭部が両方に突出して、弁頭を包容するようになって」おり、また「花弁の部分が第一段、花弁を包む間弁の部分が第2段、その外側に一般的に認められる溝状部分がなくして、外縁が第3段となり、弁区から外縁までが階段状をなしている。」「それは百濟故地でも、日本でも第一期式の新しい時期に属している」もので、この古瓦の編年上使用されている第一期式をもって、ただちに飛鳥時代とすることが、論議を複雑にさせてしまった原因のように思える。



八葉素弁蓮華文軒丸瓦

そこで、当時創建の時期を、こうした古瓦研究の成果にたって考えるならば、蘇我入鹿（ソガノイルカ）による斑鳩寺焼失事件（皇極天皇2年、西暦642年）の頃から、再び斑鳩寺の焼失する天智天皇9（西暦670年）の頃までの間に、あてておきたいのである。

この寺の創建は、いずれかの氏族の氏寺としてある。従来は、その財力を傾けて古墳の造営にあたったであろうところの地方の有力者は、この頃になると、氏神に並べて氏寺の建立をおこなうようになった。

そしてこの氏寺の各地建立の実態は、続日本紀の天平元年の条に「河内國の寺六区」と記されているように、河内一国だけで66ヶ寺の多さを数えるほどであったのである。

北河内地方では、正法寺のほかに、次の寺院跡が古代寺院として、河内66ヶ寺に含まれていたものと思われる。

讃良庵寺	四條畷市	高宮庵寺	寝屋川市
太秦庵寺	寝屋川市	長宝寺	交野市
開元寺	交野市	中山寺	枚方市
百濟寺	枚方市	蹉跎庵寺	枚方市
船橋庵寺	枚方市	九頭神庵寺	枚方市
楠葉庵寺	枚方市	西山庵寺	八幡町

なお、これらの一応の確認がなされている寺跡のうちで、第一期式の古瓦を伴っているのは、正法寺跡のほかに、楠葉庵寺・高宮庵寺のみで、これら三寺院の中では、楠葉庵寺から最も古式の軒丸瓦が発見せられている。

## 5. 伽藍の造営と正法寺

寺を建てるというが、これは大変な難事業である。

たとえば、瓦だけについて計算してみても、七堂伽藍のすべてに使用する数量は實に莫大である。正法寺の場合でも、金堂や講堂には、それぞれ数万枚の瓦が必要であるから、全部合わせれば、少くとも数十万枚の数になることであろう。

これだけの瓦は、重量にして約数百トンになるから、それこそ原料の粘土だけでもどれほど用意しなくてはならないだろうか。

瓦を焼く窯は、ひとつの窯で400枚も焼ければ大成功である。一昼夜ぶっ通しで燃やし続けて出来上がるわけであるが、かりに50万枚の瓦を焼き上げるとすると、延べにして1500窯が必要であるから、同時に10基の窯を使用するにしても、150回の焼成ということになるから燃料の薪だけでもぼう大なものである。

正倉院文書を見ると、瓦関係の工人として、生瓦作工・瓦焼工・瓦葺工・瓦窯作工の名があり、これを総称して瓦工とよんでいる。

延喜式（エンギシキ）によると、生瓦を作る工人の一日の製作能力は、女瓦・男瓦の場合で90枚、宇瓦なら28枚、鎧瓦で23枚となっているから、正法寺の場合、生瓦を作成するだけで延べ6000人以上の、あるいは1万人近くの人数を要するわけである。

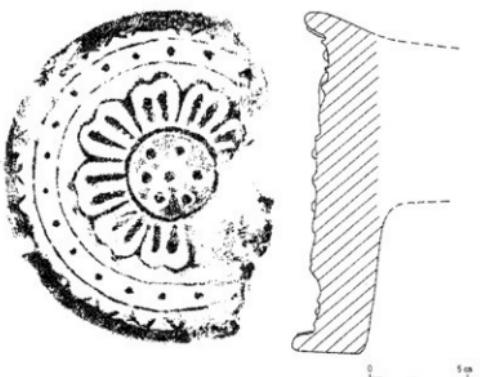
これに、瓦焼工・瓦葺工・瓦窯作工の員数を加えれば、瓦関係だけの工人の延べ必要数が計算できる。

しかし、瓦工だけで寺院が建設できるものではない。

仏像を作るための仏師はもちろんのこと、たくさんの材木を伐り、加工して建物を建てなくてはならない。しかし、ひとつの主要な建物の屋根に、5万枚の瓦が葺かれるとすれば、それだけでも重量は100トン近くになり、瓦の下にひく粘土の重さを加えると、実に150トンにもなることであろう。

したがって、直径数十センチもの巨大な柱を作らなくてはならず、これらのすべての重量を支えてなお傾くことがないように、大きな礎石と、地盤をつき固める基礎工事がいることになる。

すなわち、造寺工事とは、まさに大工事であって、着工から伽藍の完成にいたるまでには、おそらく延々と数字にわたる10年以上もの時間と、莫大な経費がついやされたのである。



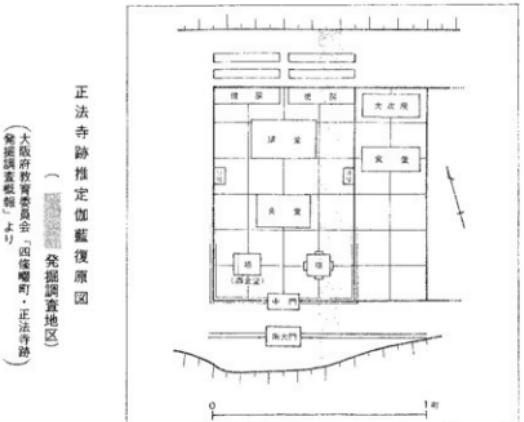
九葉複弁蓮華文軒丸瓦

正法寺の伽藍は、両塔式の形式に復元されているが、これは奈良薬師寺に典型的な白鳳時代に流行した伽藍のスタイルであると思われる。

おそらくは、創建期・藤原宮期・平城宮期ぐらいまでをかけて、ようやく奈良時代前期には、美しい両塔式の伽藍が完成したことであろう。

なお、正法寺を清滝の地に氏寺として創建した氏族としては、すでに「清滝正法寺の創建」の項でふれておいたように、新羅系もしくは百濟系と考えられる宇努氏をあてることがもっともふさわしく思える。

また、字正法寺よりやや上流に祭られる国中神社は、延喜式神名帳にも記されている古い神社で、正法寺を氏寺とした氏族の氏神であったことであろう。それが大蛇宮などとよばれることのあるのは、南約1.5Kの山間に建つ龍尾寺や、大東市の龍間寺、讃良川の水源をなす龍王池などと共に龍神信仰によるものと思われるが、国中神社のみが龍でなく大蛇としている点に、より古い信仰形態を見出したい。



## 6. 清滝の正法寺の終末

清滝にあった正法寺が、平安時代に入り、真言密教に転宗したのが、厳密にいっていつごろの出来事であったのかは明らかではないが、東高野街道の要地にあって、比較的早い時期に真言寺院の仲間入りをしたにちがいなかろう。

中野正法寺の鐘銘にも平安初期弘仁の頃の様子を「大利」としているが、その広大な伽藍は、真言寺院にふさわしく、山岳の自然地形を利用しながら、いくつもの堂塔をふやしたことであろう。

そして、長尾正俊寺の黒仏や石造十三重の塔の作られた中世に入っても、相当大規模なかつ縁起の古い寺として、存続していたことと思われる。

この寺が、衰えはじめるのは、建武新政の前後の戦乱に被災してからのことである。周知のとおり、当方は楠公ゆかりの土地柄としての伝承が多く、正法寺も含めて、特に山岳もしくは山麓の寺院は、いずれも軍事的な性格が濃厚であったことであろう。

正俊寺及び、中野正法寺の記録類から、正法寺の罹災記録は次の通りである。

元弘・建武・延元の乱——1330年代

慶長・元和の役——1600年前後

そして、途中天文年間及び、天正年間に観海上人によって再建されたらしいが、真言宗自体の衰退もあり、遂に中野の地に移転し、その後浄土宗に転宗して今日にいたっている。

なお、発掘調査とともに、多くの中世遺物が発見されている。これら記録伝承の真偽に関しても、今後の地下埋蔵構造や遺物がおのずから明らかにすることであろう。

### 註

#### ・僧尼

この時代の僧たちは、僧尼令の規定にしたがうように規定されており、布教の行為はかたく禁止せられていた。その意味では、僧侶というよりも、僧官的性格がつよい。

#### ・行基年譜

安元4（西暦1178）年にできたもので、行基の49院を述べている。しかし、行基の死後すでに430年もの歳月をすぎており、これをもって絶対視するわけにはいかない。

行基年譜に記載するところによると、49院の国別分布数は、摂津15・和泉12・山城9・河内6・大和6・京1である。

#### ・正法寺縁起

聖武の頃、行基開基。

#### ・正法寺鐘銘

聖武勅願、行基開基。

#### ・神楽良（サララ）の小野

万葉集巻の第16に、「おそろしき物の歌」として「天なるや 神楽良の小野に茅草（チガヤ）刈り 草刈りばかに 鶴を立つも」の歌があり、この小野と、正法寺の山号の小野山の関係を考える見解もある（藤沢一夫「河内国清滝寺法名正法寺考」）。

#### ・宇努造（ウノノミヤツコ）

新撰姓氏録の河内国諸藩の項に、宇努造の名があり、百濟の人弥那の子富意弥の後裔としている。また平安時代中頃に著わされた倭名類聚抄（ワミヨウルイジュウショウ）には、当

地方の郷名が甲町となっている。日本書紀の敏達天皇の条に、百濟から来朝した鹿深の臣が、弥勒（ミロク）の石像一体を持っていたことを記しているが、鹿深臣は近江国甲賀郡の豪族として、その後裔は代々甲賀郡の郡司級の地位をえていたらしい。

すなわち、鹿深・甲町・甲賀は、その文字を異にしてはいるものの、深くかかわるものと思われる。

#### ・瓦の名称

大棟の上で両端を飾るのが鶴尾（シビ）瓦や鬼瓦である。

平瓦を女瓦とよび、筒瓦を男瓦とよぶことが多い。

軒先の部分には、時代によって異なるいろいろな文様がつけられるが、平瓦の軒先にあるものを宇瓦（ノキガワラ）もしくは軒平瓦、筒瓦で軒先にあるものを鐘瓦（アブミガワラ）とか軒丸瓦とよぶ。

#### ・堤瓦（ツツミガワラ）

棟の部分をつくるために、平瓦をタテに半分に切ったもので、これを積みあげて棟にする。

#### ・瓦工たちの日当（正倉院文書）……この頃米1升5～6文

生瓦作工	10文	木工	10文～17文
------	-----	----	---------

瓦葺工	10文～11	画工	35文～36文
-----	--------	----	---------

瓦焼工	12文～15	仏工	60文
-----	--------	----	-----

木工	10文～16文	(大川 清「かわらの美」より)	
----	---------	-----------------	--

#### ・当時の物価（当時の1升は現在の約4合）

711年	米6升が1文	764年	米6升が60文
------	--------	------	---------

751年	米6升が30文	765年	米6升が120文
------	---------	------	----------

762年	米6升が42文
------	---------

## 参考文献

山口 博・櫻井敬夫：四條畷市史

井上正雄：大阪府全誌

藤沢一夫：河内国清滝寺法名正法寺考

井藤 徹・堀江門也：四條畷町正法寺跡発掘調査概報

大川 清：かわらの美

稻垣晋也：古代の瓦

佐和隆研・田村隆照：高野山

住田正一・内藤政恒：古瓦

藤島亥次郎：古寺再現

## 作成スタッフ

執筆：瀬川芳則

写真及び実測図：野島 稔

企画：井上博司

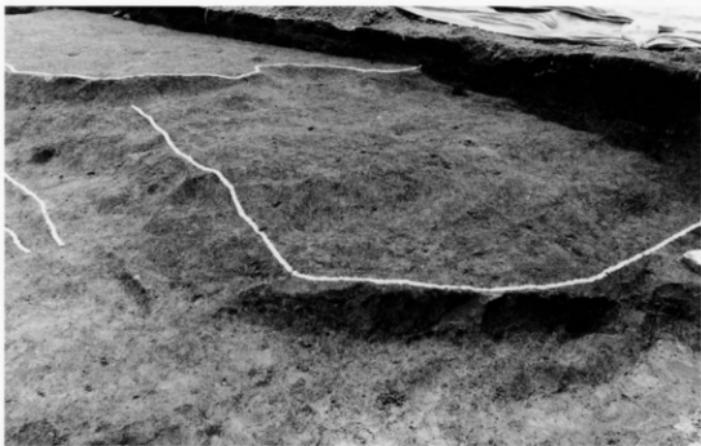
# 図版



1. 調査前全景



2. 作業状況



3. 遺構全景(北西から)



1. 調査前全景



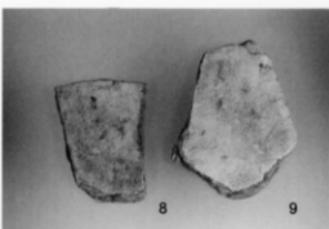
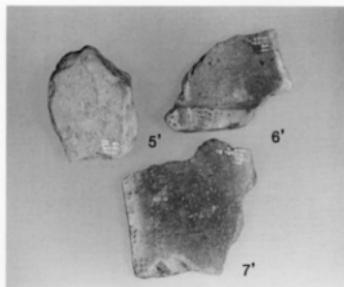
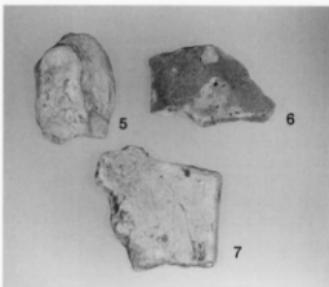
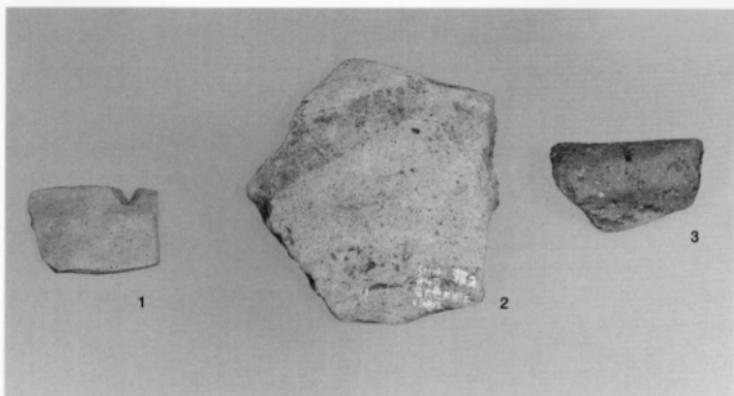
2. 作業状況



1. 遺構全景（東から）



2. 遺構全景（西から）

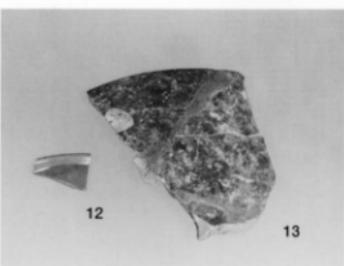




10



11

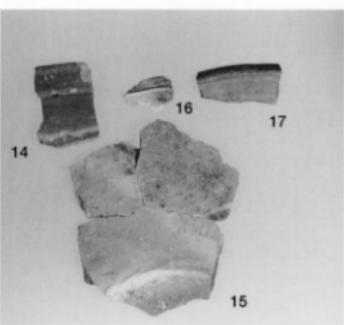


12

13



22



14

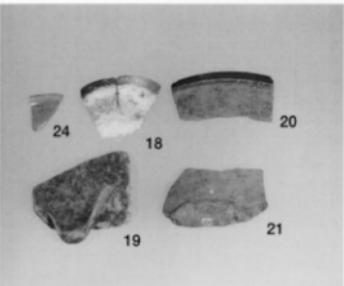
16

17

15



23



24

18

20

19

21



25

四條畷市内遺跡発掘調査  
概要報告書

平成16年4月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会  
四條畷市中野本町1-1

印刷 川西軽印刷株式会社